

「専門医に聞く 大腸疾患の検査と診断の進め方」

国立がんセンター病院長 市川平三郎 編

国立がんセンター病院長 市川平三郎

東京大学助教授 武藤徹一郎

桐生市 まろ病院長 中嶋義麿 著

国立がんセンター放射線診断部 牛尾恭輔

新潟大学教授 渡辺英伸

東京女子医科大学講師・消化器病早期がんセンター

長 廻 紘

雑誌「胃と腸」連載時に好評を博した入門講座「大腸疾患診断の考え方・進め方」が、装いも新たに単行書として1冊にまとまった。雑誌掲載時には誌面の都合で割愛された部分が大幅に復活され、また図・写真がふんだんに使用されていて、入門書としてはもちろん、専門書としても十分通用する重厚さをもったしつらいとなった。

日本でも大腸疾患の増加は著しく、好むと好まざるとにかかわらず、大腸疾患に遭遇する機会が多くなり、消化器医の裾野も広がって

きている。このような時期に、親しみやすく、しかも奥行き深いこのような本が上梓されたことは、陳腐な表現ながら誠に時宜にかなったものと言えよう。

本書は座談会形式であるから読みやすいのは当たり前だが、各 *discussant* が大腸の最新の診断学を広く暴及させようと、強い情熱をもって真剣に取り組んでいるのが行間からにじみ出ていて、単に通一遍に読み流せる内容ではなくなっている。

討論参加者は現在望み得る最高の顔触れであり、余裕をもって討論を

楽しみつづ、かつ持てるものを存分に出しきっている。質問事項は極めて具体的で、初心者の知りたい事項を網羅してある。司会役である市川博士のあいまいな返答を許さない、あるいは分かりきったこととして省略されがちな事項に対して念を押すスタイルの進行にあずかるところが大きいと思うが、初心者に必要なことは細大もらず、かつ痒い所に手が届くような記述になっている。自己の立脚点のしっかりした *discussant* ぞろいだから、必ずしも意見を同じくしない場合が少なからずみられるが、あいまいに済ましていない点にかえて好感がもたれる。

このように、本書は有用かつ刺激に満ちた本である。研修医やこれから消化器医を目指す人々だけでなく、専門医の方々にも広く一読を薦める。

本書の成功によりこれからこの手の出版が増えると思うが、簡単に読めはするが後に何も残らないというような、本書とは似ても似つかない類いの本の粗製、乱発は御免被りたい。

B5判 220頁 1986年 8,500円(〒350)

医学書院 刊